

青銅の洗盤が象徴している「きよめ」

ベレーシート

●シリーズ「神の御住まい」についての学びの第七回目です。前回は青銅の祭壇の上で焼かれる「五つのささげ物」とそれが象徴しているイエシュアの十字架の贖いの神秘について取り上げました。今回は、それに続く「神のことばによるきよめ」を象徴する「青銅の洗盤」に



ついて考えてみたいと思います。幕屋の庭に入るとそこには祭壇があり、祭壇と聖所との間に「青銅の洗盤」が置かれます。主要なテキストは出エジプト記 30 章、および 38 章 8 節です。

【新改訳改訂第 3 版】出エジプト記 30 章 17～21 節

17 【主】はまたモーセに告げて仰せられた。

18 「洗いのための青銅の洗盤と青銅の台を作ったなら、それを会見の天幕と祭壇の間に置き、その中に水を入れよ。

19 アロンとその子らは、そこで手と足を洗う。

20 彼らが会見の天幕に入るときには、水を浴びなければならない。彼らが死なないためである。また、彼らが、【主】への火によるささげ物を焼いて煙にする務めのために祭壇に近づくときにも、

21 その手、その足を洗う。彼らが死なないためである。これは、彼とその子孫の代々にわたる永遠のおきてである。」



出 30:18

青銅の洗盤
כִּיֹּור נְחֹשֶׁת
青銅の台
כְּנוֹ נְחֹשֶׁת

【新改訳改訂第 3 版】出エジプト記 38 章 8 節

8 また彼は、青銅で洗盤を、また青銅でその台を作った。会見の天幕の入口で務めをした女たちの鏡でそれを作った。

1. 「青銅の洗盤」とその目的

●主はモーセに「青銅の洗盤」(「キツヨール・ネホーシェット」כִּיֹּור נְחֹשֶׁת)と「青銅の台」(「ハンノー・ネホーシェット」כְּנוֹ נְחֹשֶׁת)を作るように告げられました。「青銅の洗盤」は「祭壇」と「会見の幕屋」の間に位置しており、祭壇におけるいけにえの血による贖い(身代わり)によって与えられる「立場」を得ることによって、はじめて洗盤に近づくことができます。洗盤の目的は、「会見の幕屋」(聖所)に入るアロンとその子らがそこに入るときだけでなく、彼らがささげ物を焼いて煙にする務めのために祭壇に近づくときにも、洗盤の水によって両手と両足をきよめるためでした。つまり、祭壇の務めと「会見の幕屋」である聖所に入るために、洗盤の水で身をきよめることが必要不可欠であったのです。

●アロンとその子らは「そこで手と足を洗う」とあります(30:19)。「そこで」と訳されていますが、原文は

מִשְׁכָּן

「そこから」(「ミンメニュー」מִמְנוּ)となっています。文法的には、起点を意味する「～から」の前置詞「ミン」(מִן)に3人称男性単数接尾辞がついたものです。これは「そこから取って」という意味で、創世記(2:17/3:3, 5, 11, 17等)を始めとして、数多く使われています。つまり、直接に洗盤の中に手(複数)と足(複数)を入れて洗うという意味ではなく、「洗盤から」(=それから)汲み取った水で両手両足を洗うという意味です。とすれば、右図のイラストは間違っていることが分かります。「そこで」というのと、「そこから」というのとでは、イメージがまったく変わってしまうのです。



●20節の「水を浴びなければならない」と訳されたフレーズも、一見、全身を洗うようなイメージに受け取られかねません。そうではなく、両手と両足を「洗盤」から汲み取った水で洗うという意味です。とすれば、当然、それに使う器具があるはず(たとえそのことが聖書に言及されていなくても)です。右図はそうした器具の想像図です。



●20節の前半では祭司たちが手足を洗うのは、「会見の幕屋に入って死なないためである」としています。また後半では、「祭壇」の務めのためにそこに近づくときにも、同様に、両手両足を洗うのは彼らが「死なないため」であり、しかもそれはアロンとその子孫の代々にわたる「永遠のおきて」(「ホク・オーラーム」חֻקֵי עוֹלָם)であるとしています。これは、主がエデンの園のどんな木から取って食べてもよいが、善悪の知識の木から取って食べてはならない。食べると必ず死ぬと言われたことと符合します。これは「いのちの木」と「善悪の知識の木」を区別されるべきこととして神は良しとされ、その区別の大切さをアダムに教えよとされたのでした。ですから、食べてはならない「善悪の知識の木」をエデンの園に神が置いたのがそもそもの間違いとする考え方は、人間的な考え方であり、的から外れているのです。

●エデンの園に置かれたアダムの務めであった「耕す」(「アーヴァド」עָבַד)こと、「守る」(「シャーマル」שָׁמַר)ことは、本来、祭司の務めです。祭司の務めとは神の御住まい(「ミシュカーン」מִשְׁכָּן)の祝福を味わうために、神が区別されたことを守るという務めなのです。それが洗盤の置かれている目的です。祭司たちは、洗盤の中に入っている水をそこから取り出して手と足を洗いきよめることをしなければ、「死ぬ」と定められました。創世記でアダムが言われた同じ思想がそこにあります。このことは、大祭司アロンとその子孫にとって、代々にわたる永遠のおきてであるとされたのです。

●洗盤があるだけではアロンとその子らたちの身をきよめることができません。務めのたびに、繰り返し、その洗盤の中の「水」を汲み取って、「手と足」を「洗う」(「ラーハツ」רָחַץ)ことが不可欠でした。今や、幕屋や神殿における祭司制度そのものはイエシュアがその務めを実現してくださったことによって廃止されましたが、それによって象徴されている事柄は、今もなおイエシュアにつく私たちに対して生きています。つまり、私たちの働きと歩みを象徴する「手と足」は、絶えず神のことばによって洗いきよめ、神の所有者として聖別される必要があるのです。なぜなら、私たちは主にあって一人ひとり祭司とされているからです。使徒パウロは自分の使命を次のように記しています。

【新改訳改訂第3版】ローマ書 15章 16節

・・・私が、異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となるために、神から恵みをいただいているからです。
私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。それは異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、
 神に受け入れられる供え物とするためです。

●使徒パウロだけでなく、私たちクリスチャンも同じく祭司としての務めを委ねられているのです。以下の
 みことばがそのことを教えています。

①【新改訳改訂3】Iペテロ 2章5

あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、**聖なる祭司として**、イエス・キリストを通して、
 神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。

②【新改訳改訂3】Iペテロ 2章9節

しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である**祭司**、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、
 やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるため
 なのです。

③【新改訳改訂3】黙示録 1章6節

また、**私たち**を王国とし、ご自分の父である**神のために祭司としてくださった方**である。キリストに栄光と力が、
 とこしえにあるように。アーメン。

●とすれば、祭司としての務めをするために、私たちが日々手と足を水で(神のことばで)洗いきよめなけれ
 ばならないのは当然のことです。

2. 「洗盤」が象徴している神のみことばによるきよめ(聖別)

●ところで、洗盤にはそれを置く「台」があります。幕屋におけるすべての「土台」(青銅や銀の台座)はす
 べてイエシュアを指し示しており、それ以外の土台はありません。したがって「洗盤」の水は、正確には、
 イエシュアを土台とした神のことばを象徴しています。「神がお遣わしになった方は、神のことばを話され
 る」(ヨハネ 3:34)とあります。また、「神から出た者は、神のことばに聞き従います。」(ヨハネ 8:47)とあ
 ります。それゆえ私たちは、日々、イエシュアの語られた神のことばに耳を傾け、その真意を理解できるよ
 うに主に尋ね求めなければならないのです。主のみことばの真意は尋ね求める者に開示されるからです。

●「青銅の洗盤」と「青銅の台」は「女たちの鏡で作られた」(出 38:8)とあります。「青銅の洗盤」と「洗
 盤の台」は、一般の人々が自ら進んでささげたささげ物ではなく、出エジプト記 38章8節によれば、「会見
 の天幕の入口で務めをした女たちの鏡」でそれを作ったとあります。ここでの「会見の天幕の入口で務めを

した女たち」とは、岩波訳聖書の脚注によれば、「聖所の入口の清掃等を担当していたものと思われる」とあります。幕屋にかかわる奉仕者の中に女性がいたことは新しい発見です。しかし、時としてそれは誘惑のもとにもなったことを聖書は記しています(I サムエル記 2 章 22 節を参照)。

(1) 神のことは人の心と想いをさらけだす

●昔の鏡は今日のような鏡ではなく、青銅を磨いたものであったようです。それも、はっきりとではなく、ぼんやりと映るものであったようです。使徒パウロの「今、私たちは鏡にぼんやりと映るものを見ています。」(I コリント 13:12)という表現がそれを裏づけています。「鏡」と訳されたヘブル語は「マルアー」(מִרְאָה)で、動詞の「見る」(「ラーアー」הִרְאָה)を語源としています。女性たちが自分の大切にしていた良く磨かれた鏡を主のためにささげたことには、それなりの意味があります。それは「隠されたもの」「映し出されたもの」を見ることにあります。「見る」とは「判別する」ことであり、「見分けること」です。誰が見分け、判別するのでしょうか。それは「神ご自身(=神のことは)」です。

【新改訳改訂第3版】ヘブル書 4 章 12~13 節

12 神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。

13 造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をします。

●神(=神のことは)は両刃の剣よりも鋭く、「たましいと霊」、「関節と骨髄」、「心のいろいろな考えやはかりごと(いずれも複数)」といった目には見えないものでも、それらの分かれ目さえも見分けて、それらを切り離すことができる方なのです。したがって、神の目をごまかし、隠し立てすることはできません。13 節にあるように、「造られたもので、神の前に隠れおおせるものは何一つなく、すべてが裸であり、さらけ出されて」いるのです。イエシュアはご自身も、「わたしが人の思い(=ヘブル的には「腎臓」)と心を探る者である」と述べています(黙示録 2:23)。

●「洗盤」とその中に入れる「水」は、いずれも「神のことは」を象徴しています。イエシュアの十字架の血潮で罪を赦されて神に近づくことのできる者とされた私たちは、神の目にすべてがさらけ出されています。「罪の赦し」がなければとても神とかがかわることはできません。旧約の祭司たちがいつも洗盤の水によって自分の働きや歩みを象徴する手と足を洗ってきよめたように、私たちも主にある者として、手や足だけでなく、心の思いやはかりごととも動機も、すべて「神のことは」によって、日々、聖別される必要があるのです。

●自分の外にあるものが、目・耳・手・口・鼻などの器官を通して入って来ます。そしてその影響をモロに受けてしまう世界に生きています。この世の知恵やこの世の思想(イデオロギー)、この世の価値観、常識などによって私たちは日々汚されているのです。ですから、みことばの洗いの更新が必要となるのです。私たちの霊の目も、この世の神であるサタンの覆いによって見えなくされてしまっていることがしばしばです。私たちの目が神の光を見ることができるよう、私たちの思いが汚されないように、神に仕える者たちは日々神のことはによってきよめられ続ける必要があるのです。

3. 花婿キリストの花嫁とされた教会のきよめ

- 使徒パウロはキリストの花嫁である教会のきよめについて、次のように記しています。

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙 5章 26～27節

26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、
27 ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

- 26節の「キリストがそうされたのは」とは、十字架による贖い(身代り)の出来事です。この出来事によって、キリストの花嫁である教会は、花婿の前に立つ立場が与えられました。ですからその立場にふさわしい実際の姿(「栄光の教会」)へと聖別されていく必要があること、つまり、「水の洗い」が必要であることが記されています。そのことをパウロは「みことばにより、水の洗いをもって」と記しています。「みことばにより」と「水の洗いをもって」は同義なのです。ここにもパウロの思惟の中に幕屋の発想が隠れています。

- 「洗い」(「ルートロン」λουτρόν)という語彙は、他にテトスへの手紙3章5節にあります。教会を「水で洗う」とは、神のことばによって教会を神のものとする(=聖別する)ことを意味します。つまり花婿は花嫁を水で洗う、すなわち「水の洗い」とは、「神のみことば」「真理のことば」「救いの福音」によって、花嫁を花嫁としてふさわしく聖別して、「しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせる」としています。「しみや、しわや、そのようなものの何一つない」というのは、まさにいのちの「みずみずしさ」を表しているのです。

- 「花嫁を花婿の前に立たせる」とは、夫婦の型である「キリストと教会」の結婚式の光景を思わせます。しかしこの「聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせる」のは、キリストの再臨の時です。そのときに、花婿なるキリストの横に完全にきよめられた花嫁なる教会が立つのです。ユダヤでは、婚約であっても法的には「妻」と同等の立場とみなされました。ですから、キリストの花嫁は婚約者でもあり、また同時にキリストの妻でもあるのです。つまり、「キリストと教会」「花婿と花嫁」は一心同体となった夫婦でもあるのです。この一見矛盾のように思える事柄こそ、ユダヤ的・ヘブル的と言われるものなのです。私たち異邦人はユダヤの慣習をそのまま理解し、受け入れるしかありません。

ベアハリート

- 最後に、幕屋の洗盤とかかわる実践的な勧めをしたいと思います。それは「なつめやしプランニング」の勧めです。詩篇92篇12節～14節を見てください。

12 正しい者は、なつめやしの木のように栄え、レバノンの木のように育ちます。

13 彼らは、主の家に植えられ、私たちの神の大庭で栄えます。

14 彼らは年老いてもなお、実を实らせ、みずみずしく、おい茂っていきましょう。

●特に、「なつめやしの木のように」というフレーズと「年老いてもなお」というフレーズに注目したいと思います。この詩篇で「正しい者」とは神の大庭に植えられた者のことです。「植えられた」とは自然にそこに芽を出して育ったということではなく、神によってどこからか移植されて、神の庭で神によって育てられたことを意味します。私たちがイエシュアによって神の大庭に招かれた、神の目に「正しい者」なのです。その者は「なつめやしの木のように栄え」とあります。右図は実をつけた「なつめやしの木」です。一房につき 1000 粒ほどの実がなります。



(1) 「なつめやしの木のように」

●その実際的なプランは 1、2 節にあります。「主に感謝ささげ、主の御名たたえることは・・・」といつも私たちが賛美している曲です。(原曲は「It is Good」)

【新改訳改訂第 3 版】詩篇 92 篇 1～2 節

- 1 【主】に感謝するのは、良いことです。いと高き方よ。あなたの御名にほめ歌を歌うことは。
- 2 朝に、あなたの恵みを、夜ごとに、あなたの真実を言い表すことは。

心得 ①「感謝すること」

●私たちは移植されたという自覚のもとに、すべては神の御手の中にあることのゆえに感謝することです。すべてのこと・・・人の目から見て、良いことも悪いことも、幸も不幸もすべて相働きて益としてくださるからです。それゆえに信仰をもって「感謝」するのです。そうすることで、どんな状況の中でも見方が変わってきます。

心得 ②「賛美すること」

●感謝だけでなく、神はいつも良い方であり、いつも素晴らしいことをしてくださる方であると賛美することです。賛美することを通して、私たちの内に働こうとする悪い思いを締め出すことができます。主を心から賛美することで、心は健やかにされます。また、賛美を通して神に心を開く備えが出来上がります。当教会のサムエル・ミニストリーでは、賛美の後にみことばの瞑想をしていますが、みことばの戸が開かれるのを私はしばしば経験しています。

心得 ③「主の恵みと真実を言い表すこと」

●これは祈りの中で、主の恵みと真実を実際に言い表すことです。感謝も賛美も実は主に対する信仰告白です。その告白の内容が主の恵みであり、主の真実です。私たちはそれを土台としてはじめて神との関係を深めることができます。

心得 ④「日ごとにすり込むこと」

●心得①②③のすべてが「日ごとに」ですが、このことは単に機械的な意味での毎日ということではありません。「朝に、夜ごとに」です。つまり、良いときも、そうでないときにも、うまくことが運んでいるときも、うまく運ばないときにも、失敗や失意のときにも、自覚的に体と心にすり込む・・・これが「日ごとにすり込む」という意味です。気が向いたら・・・という構え方ではありません。気分や感情に支配されなければ

ば、やがて「なつめやし」のように「多くの実を結ぶようになる」と信じます。

(2) 「年老いてもなお」

詩篇 92 篇 14 節

彼らは年老いてもなお、実を实らせ、みずみずしく、おい茂っていきましょう。

●「年老いてもなお」とありますから、年老いてからではなく、そこに至るまでの過程においても、多くの「実を实らせ、みずみずしく、生い茂っている」ことが可能だということです。キリストの花嫁が神のみことばによって、「しみや、しわや、そのようなものの何一つない」方向へと整えられるとあったように、私たちはますます「みずみずしく」なっていくのです。「年老いてもなお、実を实らせ、みずみずしく・・・」とはなんと祝福でしょう。

●今から四年前、私は「還暦宣言」をしました(現在 64 歳)。そのために、50 代後半からかなり意識しながら歩んで来ました。というのは、60 歳になってから本格的に始めたいことがあったからです。それは、聖書を原語で読むことです。絶えず、聖書の言葉を原語(ヘブル語、ギリシア語)で調べ、それを味わうことです。還暦を迎えるまでの期間はそのための準備として、まずは必要なツール(原語に関する辞典、文法書、PC ソフトなど)を買そろえて、それを使いこなしていく訓練を自らに課すこと。次にできるだけ原語での味わいのすばらしさを実感して、楽しむ経験を積むこと。そのことでより関心を深めて行くことを心がけました。

●「還暦宣言」は私の「リ・タイヤ」(Re-Tire)宣言でもありました。新しいタイヤにはきかえて、新しい冒険の出発(たびだち)をしました。とても地味な旅です。しかし、そんな地味な旅にも、たえずウキウキ・ワクワク・ドキドキする多くの驚きが待ち受けているのです。それを発見しに行く旅は楽しいものです。すでに四年が経過しました。

●これは私の「なつめやしプランニング」ですが、それぞれ各自、自分なりの「なつめやしプランニング」を立ててみるというのはいかがでしょうか。「聖書を原語で」とまではゆかなくとも、聖書をじっくりと読んで瞑想するという計画を、自分の生涯の中に意識的に、計画的に組み入れることです。それは必ずや大きな祝福をもたらします。しかもその祝福の一つは、聖書が約束するように、主がその者に天来のいのちの輝きである「みずみずしさ」を与えてくださるということです。このことを信じて、共に、歩みたいものです。

2016.4.24